

◎ 連合会だより

11月11・12日、全国代表者会議を328人の参加で行なった。今回の代表者会議の最大の特徴は、生命ということが全編を貫いたテーマであったことである。

高齢者と農業が素晴らしい展開をみせている。その二つが生命という太い糸で結び合っている。そこに、黄柳野の実践が加わり、教育も含めた3つが繋がった。

冒頭に続いた、伊丹、武蔵野、浮間、鳥根のヘルパーの発言は、会議全体のトーンを決したように思う。東京の浮間準備室の横倉さんは、痴呆で被害妄想の強かったSさんの介護の経験から「ヘルパーの役割とは、この人間の豊かさ、たくましさを取り戻すお手伝いをするにあり」との確信を得たという。ここに労協のヘルパーの神髄を見る気がする。全国500人の労協のヘルパーもきっと同様の経験と意思をもっているに違いない。

日本一のヘルパー集団になろうという代表者会議での提起は、ここ数年のうちに必ずできると思う。

その後が続いた自分たちがやりたい仕事をおこそうと奮闘している経験には、必死の決意がみなぎっていた。にがりをつけてトーフを固めるための地獄の特訓をうけた埼玉北部の高山さんは「一生のうちでこんな必死になったことはない」という。京都事業所、栗東事業所でも新たな仕事おこしが始まった。札幌道央の労協加盟への決意は、こうした頑張りと一体のものだった。

長野の高齢者協同組合への決意。そして、若者の頑張りがまたもうひとつの感動だった。仕事に自信をもってきた若者たちが、働き続けられる若者の協同組合を真剣に求め始めた東京の病体事業所の模索は、きっと労協の未来を担うと思う。

鍛谷 宗孝（労協連合会・専務理事）

◎ センター事業団だより

三重・沖縄・愛知・福岡と続いた高協設立は、我々の根本を揺るがす大運動・大飛躍に力を与えようとしている。高協をつくる事そのものが、確かに時代を切り拓き、多くの人々の共感の中で、協同組合の価値形成を進めている事を実感する。一方で、これを支え推進する今の我々の主体の力も、否応なしに高まらざるを得ない。それは、労協組合員としての一人一人の力、労協らしい組織、そして労協でこそできる事業の3つが相関し合っ

てつくられる力である。ここにきて、事業拡大の可能性がにわかにも高まっている。日医大第2病院・聖マリアンナ病院・大阪・吹田済生会病院・小諸厚生病院などの大病院と、院内感染予防・廃棄物処理を切り口に話し合いが進んでいる。旭川・鶴岡と続いた老健施設の給食などの総合的な委託運営の可能性、産消連帯のネットワークづくりの開始、空白群馬での拡大など、全てが全国化する新しい展開である。ま

た、高協基礎講座をバネに、ヘルパー事業の展開を目指して養成講座を、いくつかの県で取り組みはじめています。

こうした新しい可能性は、一人一人にとっての「労働」と、生命・地域のための「仕事」とを結び付けるネットワークの中で「事業化」していくという事を如実に物語っている。こうした点に立って、組合員の成長と組織の飛躍が目に見えるような戦略を、「東京北部」「東京東部」「盛岡」「大阪」などをモデルに、経営委員会が中心となって描く作業をはじめています。今ある事業そのものの発展や、他の事業・組織との結びつきの中で生まれる可能性など、格段に視野を広げる事が求められる。この根幹は、戦略そのものに組合員と地域が共感するようなものを提示し得るかどうかである。この新たな挑戦が、11・12日の全国代表者会議ではじまる。

古村 伸宏（労協センター事業団・事務局長）